

南方熊楠全集

4

南方熊楠全集

4

平凡社

南方熊楠全集（全一〇卷）

第四卷 雜誌論考Ⅱ

定價 二八〇〇円

昭和四十七年七月二五日 初版第一刷発行

著者 南方熊楠

発行者 下中邦彦

発行所 株式会社 平凡社

東京都千代田区四番町四番地

郵便番号 一〇二

電話 (二六五)〇四五二

振替 東京 二九六三九

印刷 東洋印刷株式会社
製本 株式会社石津製本所

© 岡本文枝 1972

0339-429040-7600

凡 例

一、本全集は、南方熊楠が公表した論考、隨筆、英文著述、ならびに未公表の論考、手稿類などを集大成することを目指した。したがって生前刊行された『南方閑話』『南方隨筆』『続南方隨筆』の三冊の単行本、および死後刊行された乾元社版『南方熊楠全集』に比し、以下の諸方針により、大幅に増補されている。

1. 国内で、著書として、あるいは雑誌に発表された文章は、内容がはなはだしく重複する一、二の例外を除き、すべて収録する。また新聞に掲載された文章も、主要なものには収録する。

2. 外国の刊行物に発表された英文著述および未公表の英文論考の主要なものは原文で収録する。その校訂には監修者の一人である岩村忍が当たる。

3. 書簡は、学術的および伝記的に重要な内容をもつものを、入手しうる限り、完全な形で収録する。

4. その他、未公表の論考、手稿類、日記の一部、年譜、著述目録索引を付載する。

5. 以上の諸資料のほとんどは南方家に所蔵されていたもので、それらの整理には監修者の一人である岡本清造が当たる。

二、表記は原則として「現代かなづかい」に改め、送りがなも（有た↓あつた 名く↓名づく 息ず↓息ます など）のように）読解の便をはかって付加し、大部分の接続詞、副詞、助詞なども、漢字をかな書きに改めた。また、カタカナ・漢字混交文は、特殊な植物学論文（横書き）を除き、ひらがな・漢字混交文に改めた。

三、漢字は、当用漢字、同補正案、人名用別表にある字体は、これを使用し、また一部の俗字、同字などで現在常用されないものは、通用のものに改めた（怪↓怪 耻↓恥 咀↓詛 など）。ただ、著者独特の書きぐせである用語、用語は、肉筆手簡、初出雑誌などと校合のうえ、残したものが少なくない（たとえば愛憎（愛想）、居多（許多）などの用語はそのまま残し、臆と憶、希と稀、注と註の混用などはあえて統一しない）。

四、引用文は、著者が内容をとって略述し、あるいは書き改めたと思われる場合を除き、可能な限り原典と照合、校訂した。また漢文の引用文は「読み下し文」に改め、この部分は、一般の「」に對し小さい「」で区別した。読み下しには飯倉照平が当たり、監修者の一人である入矢義高が校閲した。

五、外国人名・地名などの固有名詞および若干の普通名詞で、現在常用されない漢字表記は、カタカナに改めた。ただし、初出にルビを付した出典名は漢字表記のままとした。また、これらの出典の訳名および当初からのカタカナ表記は論文によってかなり異同があるが、これらは少数の例外を除いて、同一論文内で統一するにとどめた。なお、デ↓ジ ツ↓ズ などの書き改めは行なつた。

六、書名および雑誌名には「『」論文名には「」」を付し、欧文では、著者が多く用いた方式に従い、書名は論文名は「」に統一した。なお巻号数、頁数を表わす漢数字は、十方式を用いず一〇方式とした。

七、ルビは、既刊文献にあつて著者独特の読みぐせと思われるものは、これを生かし、さらに一般の難読語にも、なるべくルビをつけた。句読点、改行、字下り、小字の扱いなどは、読解の便をはかってあらたに整理した。

八、既刊文献における削除部分、欠字および伏字は、可能な限り復原した。なお、原典の欠字と判明したものは□□、復原不可能の箇所は××で残した。

九、本文中の校注補訂は「」をもって示し、著者の手沢本・手沢雑誌における書き込みを本文中に挿入した場合は、〔著者書
きこみ〕と特記した。また、各論文の発表または執筆年月日、掲載雑誌または新聞名、巻号数は、文章の末尾に付記

した。以上の諸校訂には飯倉照平が当たった。なお、特に必要な場合には、使用したテキストに関し、論文の末尾に注記を付した。

本書（第四巻）は、既刊の第三巻、続刊の第五巻とともに、諸雑誌に掲載された論考（英文論考を除く）を収録する。本書には『彗星』以下一二誌所載の論考を雑誌別に収録した。ただし、『民俗学』の「子の日の遊び考」は、すでに第一巻（十二支考）の「鼠に関する民俗と信念」第二節に収録されており、また『あかほんや』の「余り茶を呑んで孕んだこと」は、『民俗学』の「余り茶を飲んで孕んだ話と手孕村の故事」の中に全文が取り入れられているので、ともに除外した。なお、『末摘花通解』は、雑誌ではないが、『あかほんや』と不可分の関係にあるので、これと併せて収録した。詳細については、その末尾の注記を参照されたい。

各雑誌の論考の配列は、原則として掲載巻号順によった。ただし、以下の諸点について若干の例外がある。

1. 独立の論考を初めに配列し、次に「一言一話」「寄合咄」のような固定欄などに掲載された短篇をまとめて配置した。この場合、短篇の総括表題はなるべく原雑誌によったが、適当な表題が見当たらない場合は、便宜的に「小篇」を用いた。

2. 以前に発表された論考に対する補足・追加として書かれた短文は、【増補】【追記】等として、原論考に続いて収録し、その末尾に掲載雑誌名・巻号数を付記した。また、その短文に独自の題名がつけられている場合は、これをその冒頭に記した。

3. 『彗星』の独立論考では、西鶴をはじめとする江戸文芸「輪講」関係のものを最初にまとめた。特に、「読」「一代男輪講」では、各小論の配列を、雑誌の巻号順から全く離れて、西鶴の『好色一代男』の巻節順によった。その詳細については、篇末の注記を参照されたい。

テキストは原則として著者手次の初出雑誌を用い、著者の「書きこみ」なるべく生かした。また、乾元社版『南方熊楠全集』に収録されているものについては、これを参照した。この場合、たとえば『民俗学』の「鮑が難船を救うた譚——鵲蚌の故事」や「千疋狼」等のように、雑賀貞次郎氏によって著者の「書きこみ」が整理されている場合は、これを尊重し、〔補〕〔追〕等の記号を付して、挿入または付記したものもある。なお、『彗星』の江戸文芸「輪講」関係の論考については、青蛙房刊『西鶴輪講』（全五巻）のほか、『江戸文学輪講』『江戸前期輪講』を参照した。

著者は、『続南方随筆』に続いて、『続々南方随筆（仮題）』の準備を進めていた。これは完成・刊行の運びに至らなかったが、著者肉筆または雑賀貞次郎氏等筆写の草稿が残されており、その中には、本巻収録の論考を増補・改訂したものも含まれている。この場合は「続々南方随筆稿」をテキストとし、初出雑誌と対校して、明らかに筆写のさいの誤記と思われるものを正すにとどめた。この場合、文中の〔補〕、篇末の【増補】【追記】等の文章が増補された部分である。以下に、「続々南方随筆稿」をテキストとした論考を、掲載順に列記する。

《彗星》 「小鳥狩に梟が出る」「お寺小姓」「蚊帳の雁金」「金魚」

《土のいろ》 「武光式部少輔のこと」

《紀伊史料》 「加太の立て権」

《旅と伝説》 「馬角さん」「人に化けて人と交わった柳の精」

《民俗学》 「易の占いで金取り出だしたること」

《俚俗と民譚》 「もぐらの嫁探し」

目

次

凡例

彗星

読『一代男輪講』……………5

小鳥狩に梟が出る……………63

お寺小姓……………70

読『一代女輪講』……………78

読「五人女輪講卷二」……………84

読「心中二ッ腹帯輪講」……………87

読「世間猿輪講」……………89

読「夢想兵衛輪講」……………91

性面の流出……………95

蚊帳の雁金……………100

女順礼ならびにサンヤレのこと……………105

金魚……………108

小篇……………112

一寸法師と打出の小槌 112 松茸 113 鉄漿 114 豆腐 114 焼蟹食い合う中 115 売女の名歌 115 かげろ

う 116 (失題) 117 チンブンカン 117 チチンブイブイゴヨノ御宝 118 赤い物 118 読「俳語堀之内

詣」 119 鰐屋 120 相似た東西笑話 120 『新著聞集』の著者 121 信長、秀吉、家康の性格を表わした

句 122
似た山 123

なら

「春日神社釣燈籠の銘文」について…………… 125

キリゴケについて…………… 126

土のいろ

『土のいろ』を読みて…………… 127

武光式部少輔のこと…………… 130

一言一話…………… 135

一の宮の南天 135
蚊帳に雁の絵を描くこと 135

紀伊郷土研究

根来のこみちゃ…………… 137

むつかしい熊野の方言…………… 140

紀伊史料

「田辺名物考」について…………… 143

加太の立て櫓…………… 145

グロテスク

尾崎君の「振鷺亭の怪談会本」を読む…………… 171

旅と伝説

桜を神木とすること

..... 175

馬角さん

..... 184

「釣狐」の狂言

..... 190

人に化けて人と交わった柳の精

..... 196

婦人の腹中の瘡を治した話

..... 202

驢の耳を持った皇帝

..... 210

兄弟契り

..... 217

膺孝行を褒賞した話

..... 230

太田君の「進軍中に見た支那習俗」(一)を読む

..... 246

小 篇

..... 266

鶯替神事について

刺なきイバラ²⁶⁶ イチハツを屋根に栽えること²⁶⁸ ナナカマドの木が雷を避けるということ²⁷¹えのこ草の歌²⁷⁵ 胴あげについて²⁷⁶ 酢と酒と醬油が湧き出る三つの壺²⁷⁷シの字嫌い²⁷⁸ 一休和尚長い字を書いた話²⁸²

民俗学

旗振通信の初まり

..... 287

ゴッサン

..... 292

邪視について

..... 295

狐と雨	298
庚申鳥とゴキトウ鳥	306
七種の菜粥	309
鳥の金玉	312
鮑が難船を救うた譚——鰯蚌の故事	329
千足狼	338
「紀伊の国」の端唄	363
易の占いして金取り出だしたること	371
亀の甲	375
往古通用日の初め	380
催促する動物の譚	382
泡んぶくの敵討	392
太鼓の中に人	400
美人の代りに猛獣	404
鯉鳥——燕の継子殺し	407
啞人が鳥を見て言い出す	413
ドンコの類魚方言に関する藪君の疑問に答う	416
ぬくめ鳥	421

額より妙相を現ぜしこと

423

足を薪とした怪婆

426

源為朝一箭で船を射沈めたこと

429

樟柳神とは何ぞ

433

塩茄子の笑話

453

余り茶を飲んで孕んだ話と手孕村の故事

465

寄合咄

480

移動する魚に関する俗伝

480

刀剣吼えたこと

481

虎が人に方術を教えたこと

482

邪視という語が

早く用いられた一例

484

金剛石採取の咄

486

大鼠

489

日を負うて戦うこと

491

毒が変じて薬とな

る

493

シメナワについて

496

蟪蛄

498

「紀伊の国」の根本唄

500

尻切れニナの話

501

阿育王と蜂

502

紙上問答

504

質問

504

応答

538

余白録

558

くどき節「兄妹しんじゅ」

558

カシャンボ(河童)のこと

558

百合若大臣の子孫

559

秤り目をごまか

す狐魅

559

盥を敲いて急を報ず

560

厠で唾はくを忌む

561

人が虫になった話

561

支那の初夜権

562

一極めの詞

563

あかほんや・末摘花通解

川柳句解二則

565

「書を好む者の三病」について	569
『末摘花通解』補説	570
岡山文化資料	
馬鹿婿	581
アマンジャクが日を射落とした話	584
芳賀郡土俗研究会報	
『芳賀郡土俗資料第一編』を読む	589
小 篇	595
一目の虫	595
尻馬の尻馬のまた尻馬に乗る	597
煉粉を塗る話	597
俚俗と民譚	
もぐらの嫁探し	599
地球志向の比較学	605
鶴 見 和 子	

南方熊楠全集
第四卷

雜誌論考
Ⅱ